日本コミュニティ心理学会第 27 回大会

「日常と非日常をつなぐ」

プログラム最終版

目次

会場案内 …… 02
タイムスケジュール …… 05
基調講演 …… 06
大会企画シンポジウム …… 07
プレコングレス …… 08
委員会企画 …… 09
大会企画 …… 10
会員自主企画 …… 11
ポスター発表 …… 16

会場案内

Ⅰ　会場アクセス

1．会場まで

【会場・アクセス】

・立正大学　品川キャンパス13号館５・６階
　〒141-8602　品川区大崎4-2-16
　　※　基調講演は隣接する11号館1151教室で実施します。
・駐輪・駐車スペースはありません。自転車やお車での来場はご遠慮ください。

【最寄り駅】

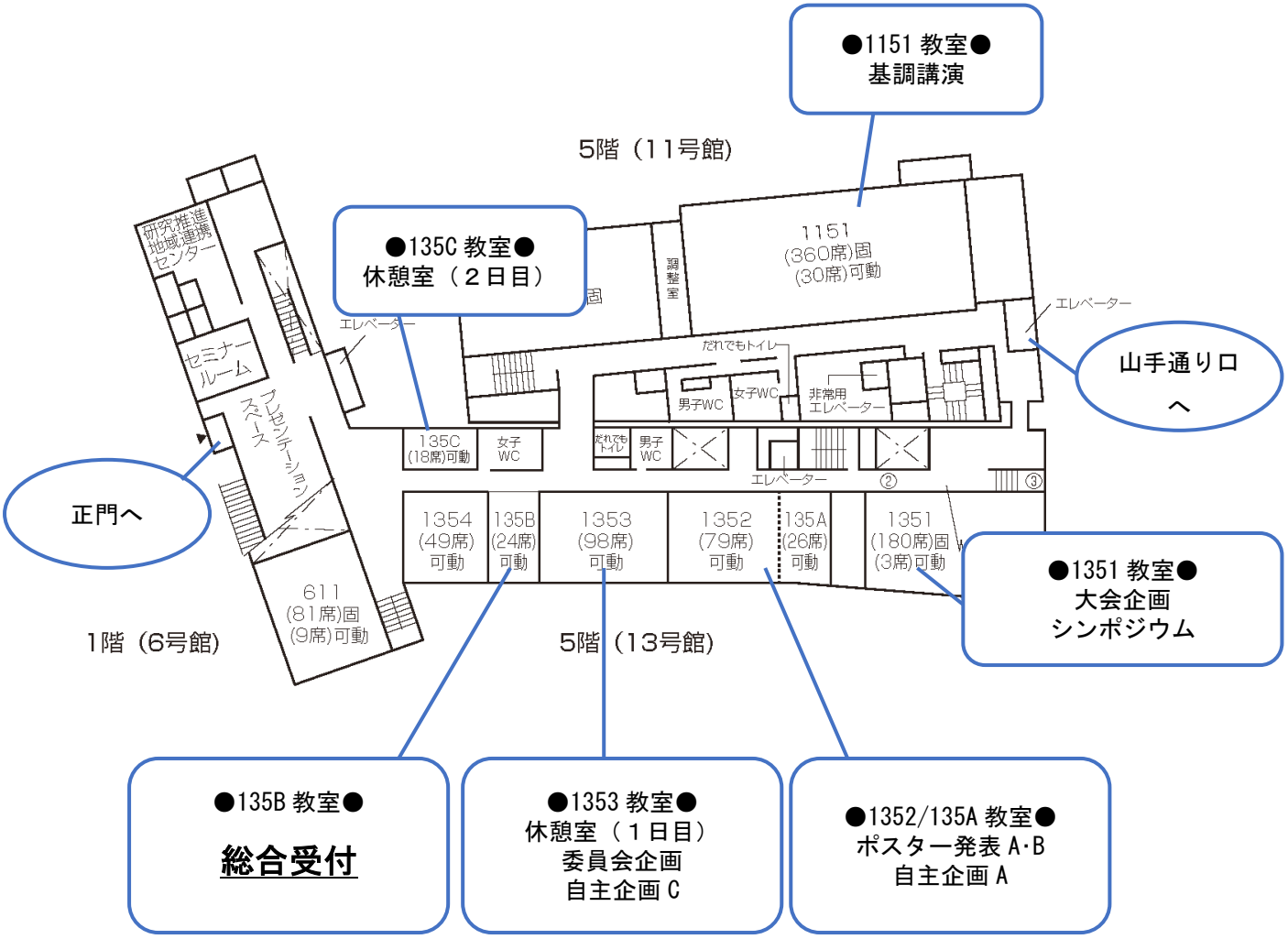
・JR　大崎駅、五反田駅から徒歩10分
・東急池上線　大崎広小路駅から徒歩2分

●注意点

・学会場へのルートは「正門」「山手通り口」の２つがあります。山手通り口からはエレベーターで入校可能ですが収容可能人数が少なく速度も遅いため、基本的には正門からの入校をご検討ください。
・詳細なルートは別途メールにてご案内いたします。

Ⅱ　構内案内

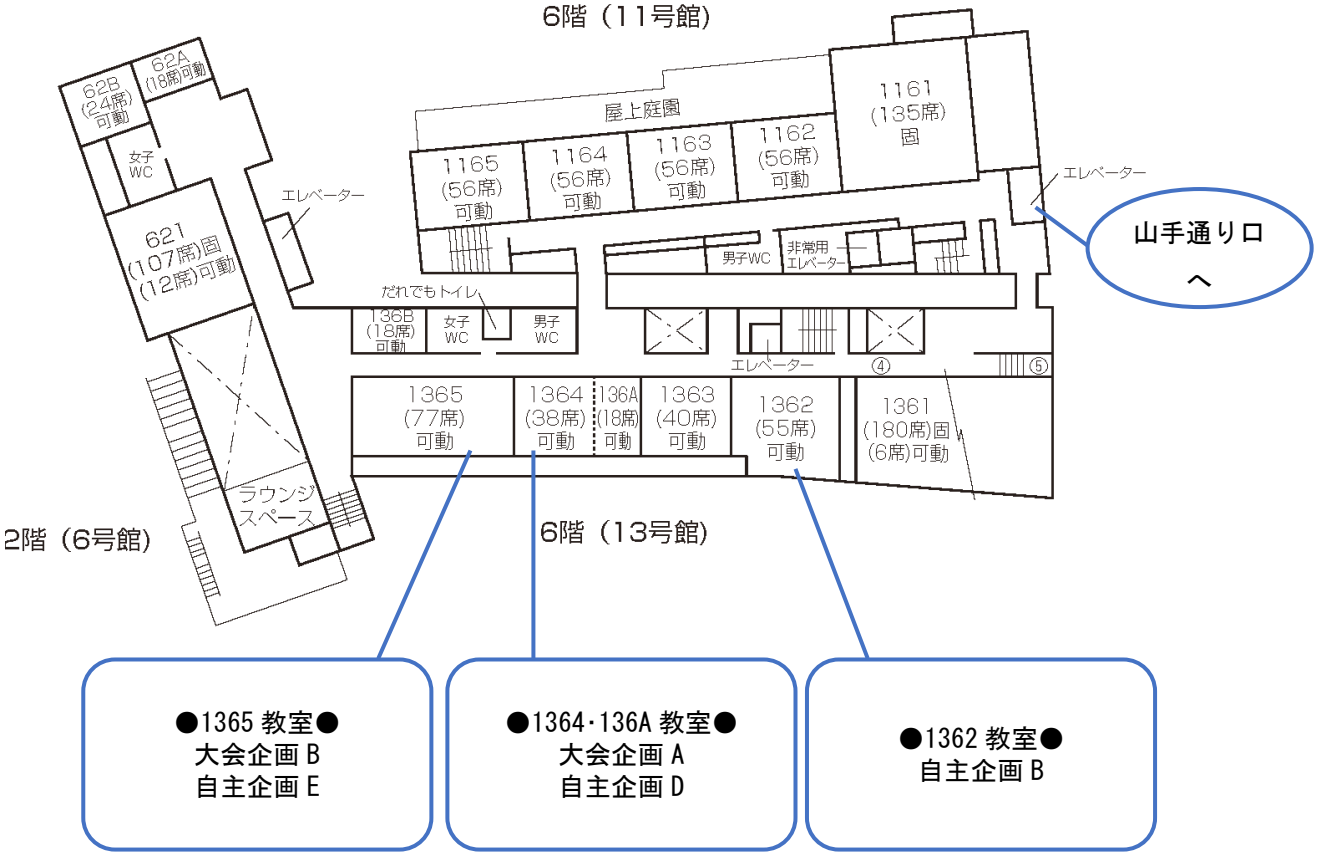
１．１３号館５階・１１号館５階



※　プレコングレス・懇親会は 13 号館８階で実施します
　　11 号館あるいは 13 号館のエレベーターから８階へお進みください
※　13 日は 11 号館で別の団体が学会を行います、お間違えの無いようご注意ください

Ⅱ　構内案内

２．１３号館６階・１１号館６階



※　プレコングレス・懇親会は 13 号館 8 階で実施します
　　11 号館あるいは 13 号館のエレベーターから 8 階へお進みください
※　13 日は 11 号館で別の団体が学会を行います、お間違えの無いようご注意ください

日本コミュニティ心理学会第 27 回大会
タイムスケジュール

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00
11日									プレコングレス 研究会制度を知ろう 17:00 - 18:30			

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00
12日			ポスター発表A 10:30 - 12:30			基調講演 よさこい系祭りにみる日常と非日常の新しい形 13:30 - 15:00		大会企画シンポジウム 災害時におけるコミュニティ心理学的支援 15:30 - 17:30			懇親会 18:00 - 20:00	

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00
13日		ポスター発表B 10:00 - 12:00 委員会企画 コミュニティ心理学の実践と研究における価値観を考える 10:00 - 12:00			総会	大会企画 研究構想を語ろう 13:40 - 14:40		会員自主企画 14:45 - 16:45				

●基調講演

10月12日（土）13:30－15:00　　11号館５階1151教室

よさこい系祭りにみる日常と非日常の新しい形

―心理学と社会学の対話―

【講師】

・芳賀 学　上智大学　総合人間科学部

・久田 満　立正大学　心理学部

【要旨】

著名な都市社会学者、松平誠は、現代社会を「ハレハレ社会」と呼んだ。伝統的な日本社会において、日常(ケ)と分離されてきた非日常(ハレ)が拡大増幅されて、現代社会では日常の中に充満しているという認識だ。確かに、ご馳走・お洒落な服装・音楽・踊り・酒など、従来ハレを構成してい た諸活動の多くは日常的に存在するようになった。もはや日常と分離された非日常に存在の余地はないようにもみえる。

しかし、その一方で、伝統的な非日常を吸収した新たなる日常の拡大は、新たなる非日常を生み出してもいる。この講演では、よさこい系祭りなど、若者を中心に支持され拡大している新種の祭りを取り上げて、現代社会における日常と非日常の新たな関係について、宗教社会学とコミュニティ心理学との対話を通して理解を深めていく。

※本基調講演は立正大学心理学部との共催となります。

【講師紹介】

芳賀 学 (はが まなぶ)

専門は宗教社会学•文化社会学。専門社会調査士。東京大学大学院で学び、東京学芸大学を経て、現在、上智大学総合人間科学部社会学科教授。大学院時代に宗教学者島薗進の指導の下、新宗教青年部の実地調査に携わって以来、新宗教、 精神文化、祭りなど、若者が熱心に関わる活動のフィールドワークを積み重ねてきた。

久田 満 (ひさた みつる)

専門はコミュニティ心理学。臨床心理士・公認心理師。上智大学文学部心理学科卒業後、慶應義塾大学大学院社会学専攻修士課程、博士課程を経て、東京大学医学部助手、東京女子医科大学看護学部助教授、上智大学総合人間科学部教授を経て、 2024 年 4 月より立正大学心理学部特任教授。東日本大震災の発生直後から主に福島県内の県立医科大学、病院、中学校などにおいて支援活動に携わる。

●大会企画シンポジウム

10月12日（土）15:30－17:30　　13号館5階1351教室

災害時におけるコミュニティ心理学的支援

―非日常から日常へとつなぐために―

【登壇者】

話題提供	萩原 豪人	杏林大学保健学部
	小林 深吾	ピースボート災害支援センター
	菅井 裕行	宮城教育大学教育学部
指定討論	芳賀 学	上智大学総合人間科学部
	飯田 敏晴	駒沢女子大学心理学類
司会	久田 満	立正大学心理学部

【要旨】

日常が突然、非日常に変わる。災害の発生がその典型例であろう。本年元日に起きた能登半島地震において も、数万人の日常が一変した。彼ら被災者の希望は、あえて集約すると「日常に戻ること」である。いつものように 学校に行き、仕事に励み、夕食時には家族で食卓を囲み、風呂に入って疲れを癒し、穏やかな気持ちで眠りにつ くという日々の暮らしに戻りたいという当たり前の望みである。

本シンポジウムでは、突如、非日常の状態に突き落とされた災害の被災者に対して、コミュニティ心理学を学 ぶ者は何ができるのかを考えたい。具体的には、発災直後に被災地に赴く際に必要な心構えとは何か。被災者 に対する心のケアではどんなスキルが有用なのか。さらに、近い将来起こり得る被害を最小に抑えるためにはど のような防災対策が必要なのか等について、他領域(宗教社会学)の視点も交え「普遍的な見解」を語り合う時間としたい。

登壇者は、今年の３月から６月にかけて、日本コミュニティ心理学会ワーキンググループが実施した能登半島地震チャリティ研修会の講師の方々ならびに宗教社会学の専門家である。

●プレコングレス

10月11日（金）17:00－18:30　　13号館8階コミュニティラウンジ

将来構想委員会共催企画

「研究会制度を知ろう」

この度、日本コミュニティ心理学会では、研究や実践・教育などで志を同じくするメンバーからなるコミュニティ（仮称：研究会）を生み育て、支援（エンパワー）する仕組みづくりをしていきたいと考え、「研究会」制度（仮）を設置しました。

その結果、会員の申請に基づき６つの団体が研究会として認定され、現在活動を行っています。研究会制度については、現在をトライアル期間と位置づけ、学会として今後の在り方の可能性を検討しています。

そこでこのプレコングレスでは、認定された研究会の中から希望する団体にご登壇いただき、活動の内容についてご紹介いただきます。

会員が研究会を通してどのような活動を行っているのかを知り、会員同士で共有することで、研究会と学会の更なる活性化を図りたいと考えています。

【登壇予定団体（５０音順)】

アクションリサーチ研究会
NPO 法人日本ファンクショナルタッチペアレンティング協会
踊り場ラボ
関西ひきこもり支援者実践研究会
「キャリアと文化心理学」研究会
コミュニティ心理学的支援研究会

●委員会企画

10月13日（日）10:00－12:00　　13号館5階1353教室

国際交流委員会企画シンポジウム

コミュニティ心理学の実践と研究における価値観を考える

―世界の潮流を踏まえて―

企画者・司会者	板東 充彦	跡見学園女子大学
企画者・司会者	桑山 碧実	大阪大学
講師	笹尾 敏明	国際基督教大学
話題提供者	川野 健治	立命館大学
話題提供者	柳井 静香	デポール大学大学院
指定討論者	高橋 美保	東京大学

1965 年に創始されたコミュニティ心理学は、各地域社会で生じる課題への対応を模索する過程で様々な発展を遂げてきたが、他地域との交流がなければ学問の発展に限界が生じるであろう。国際交流委員会は、世界各国のコミュニティ心理学の歴史と潮流を知り、それらとの交流を通じて我が国及び世界のコミュニティ心理学の発展に寄与することを目指す。

本委員会企画では次のように進行する。①笹尾敏明先生による「世界のコミュニティ心理学の潮流」についての講話。②川野健治先生・柳井静香先生による、諸外国の実践家・研究者との交流を通じて得た知見や問題意識の共有。③Moshood Olanrewaju 先生・Dicky Pelupessy 先生からのビデオメッセージ。④高橋美保先生による指定討論。⑤フロアを交えたディスカッション。

実践と研究を通じてコミュニティ心理学が共有する“価値観”とは何であろうか。本企画では、世界各国の潮流に学びつつ、コミュニティ心理学の価値観について考える機会としたい。

●大会企画

10月13日（日）13:40－14:40　　13号館6階1364･1365教室

研究構想を語ろう

発表を希望される会員の方から、現在構想している研究について簡単にご紹介いただき、フロアの方々と自由に意見交換をする企画です。当日は、オンライン上でもコメントをできるようにし、なるべく多くの方々のご意見をもらえるような場とします。

※　発表題目は当日変更となる場合があります

研究構想を語ろうＡ　【13 号館 6 階 1364 教室】

メンタライジングの生起を予測する「社会的態度」の構成と測定の試み
―コミュニティアプローチにおけるメンタライゼーション理論の応用に向けて
　発表者　有宗 和紀　専修大学大学院

インターネットでの“生活”における心理的支え
　発表者　土屋七瀬　跡見学園女子大学大学院

山伏体験ツアーの心理的効果検証
　発表者　宮下 麻美　北海道大学

研究構想を語ろうＢ　【13 号館 6 階 1365 教室】

大学生における援助要請の性差の解明
　発表者　鎌田 真実　北翔大学大学院

スティグマ化された地域を生きる母親たちの子育て支援における多主体協働
―〈地元〉共同体の当事者参画の重要性
　発表者　桑山 碧実　大阪大学大学院

●自主企画

10月13日（日）14:45－16:45　　13号館5階1352教室

自主企画Ａ　ラウンドテーブル

土地に根差したコミュニティ心理学について考える

企画者・司会者　河野 暁子　岩手県立大学・立命館大学大学院
話題提供者　　河野 暁子　岩手県立大学・立命館大学大学院
話題提供者　　村本 邦子　立命館大学

自身がアメリカ先住民である研究者の Joseph P. Gone は、American Journal of Community Psychology の中で、先住民コミュニティで起こるメンタルヘルスの問題を解決するには、西洋の白人がつくりだしてきた心理学ではなく、コミュニティに根差した indigenous knowledge や indigenous spirituality を重んじるべきであり、専門家による支援は“psy-colonization”だと主張している。企画者たちは東日本大震災後の東北に関わり続ける中で、その土地で継承されてきた民話や祭りなどは、コミュニティが災厄を生き抜くための手がかりであり、それらを「土地の力」や「土着の知」と表現してきた。本企画では、西洋の個人主義の心理学ではなく、東北のように土地に根差したコミュニティ心理学を、参加者とともに模索したいと考えている。

●自主企画

10月13日（日）14:45－16:45　　13号館6階1362教室

自主企画Ｂ　ラウンドテーブル

なぜ「科学者実践家モデル」を継続するのか？あるいはしないのか？

企画者・司会者　三宅 善子＃＃一般社団法人こころの研究所レタス・
児童家庭支援センターつるみらい
話題提供者　髙木 伸也＃＃一般社団法人こころの研究所レタス・
株式会社 AiCAN
話題提供者　金武 李佳＃＃心理臨床オフィス　ルナール・
仁精会　三河病院

「科学者実践家モデル」は、第２次世界大戦から帰国したアメリカ人兵士の精神衛生問題に対処できる臨床心理学者の養成が急務だったことから登場した歴史がある。日本においては、専門家養成プログラムの強化や大学院教育プログラムとしての機能が必要だと言われている（松見、2016）。臨床心理士の専門業務の中には、臨床心理査定・臨床心理面接、臨床心理的地域援助に加えて、調査・研究が含まれている。このように、教育課程修了後にも「科学者実践家モデル」を継続することが求められているが、どのくらいの心理職が継続しているか、実態は明らかになっていないうえ、実感としても継続することは難しいと感じる。そこで本企画では、教育課程修了後の「科学者実践家モデル」を追求する上で生じる、リアルな阻害要因や促進要因に注目する。臨床家、研究者、学生などあらゆる立場の人と一緒に「科学者実践家モデル」継続の実際を話すところから始めたい。

●自主企画

10月13日（日）14:45－16:45　　13号館5階1353教室

自主企画Ｃ　シンポジウム

地域に根ざしたスクールカウンセリングと スクールソーシャルワークについて考える ―神奈川を例として―

企画代表者・司会者	横山 孝行	東京大学
話題提供者	武田 恒平	平塚市
話題提供者	石川 泰輔#	海老名市
話題提供者	立川 祥恵#	横須賀市・海老名市
話題提供者	遠藤 建人#	元横浜市・田園調布学園大学

コミュニティ心理学では、生態学的視座の観点から人間を理解することが重視されている。環境の特徴によって人々の行動傾向や生じる問題、それに対する対応策も異なってくるだろう。環境要因を考慮した支援のあり方を検討することは重要であると考える。

人々が暮らす生活圏としての街は人口動態、生活スタイル、産業、経済規模、交通、歴史、文化など、それぞれが固有の特徴を持っている。公立学校のスクールカウンセリングとスクールソーシャルワークにおいても、支援体制や教育行政の方針等は市区町村によって様々である。

本企画では、神奈川県での活動経験があるスクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーから、各市の特徴に応じた日頃の支援活動について話題提供し、地域に根ざしたスクールカウンセリングとスクールソーシャルワークのあり方について議論する。

●自主企画

10月13日（日）14:45－16:45　　13号館6階1364教室

自主企画Ｄ　シンポジウム

孤立予防のために切れ目ない居場所づくりを！

企画代表者・司会者　吉永 真理　昭和薬科大学
企画者　久田 満　立正大学
話題提供者　山田 文　目白大学
話題提供者　菊地 浩旦　上智大学
話題提供者　伊藤 慎悟　埼玉学園大学

日々の報道の中で、私たちはさまざまな統計データを突きつけられる。例えば、引きこもり状態にある 15-39 歳は推計 541、000 人、2021 年度には過去 1 年間にメンタルヘルス不調により休業・退職した労働者がいた事業所は 10.1%、子育て中に孤立や孤独を感じた女性は 74.2%・男性は 35.5%、2022-2023 年に妊娠中から産後 1 年以内に自殺した女性は 118 人、過去最多となった不登校児童数は 299、048 人、子ども・若者の自殺は 513 人（2023 年）である。生まれてから、歳をとって亡くなるまで、孤独感や孤立の問題に悩まされ、つながりのない中で亡くなる人が後を絶たない状況がある。孤独・孤立対策推進法が成立したものの、特に弱い立場にある人や、もともと脆弱な繋がりしか有していなかった人は、どうしたらよいかわからず、助けを求めることもできないでいる。Klinenberg が述べたように「集まる場所が必要」なのである。しかも切れ目なく。この企画では切れ目ない居場所づくりについて今できることを考えたい。

●自主企画

10月13日（日）14:45－16:45　　13号館6階1365教室

自主企画Ｅ　ラウンドテーブル

ワールドカフェによるコミュニティ心理学的支援の実践的検討

企画代表者・司会者　飯田 敏晴　駒沢女子大学
話題提供者　　板東 充彦　跡見学園女子大学

企画者らは、2021-2023 年度に当学会教育研修委員会に所属し、委員会活動の一つとして 2022 年度に「コミュニティ心理学的支援法研究会」を開催した。その 1 年間の成果をまとめた論考が「コミュニティ心理学的支援のアセスメントと介入技法－テーマティック・アナリシス法による実践家のディスカッションの分析より－」（板東・飯田、2024）としてコミュニティ心理学研究第 27 巻第 2 号に掲載された。当研究会は 2024 年度に再開され、現在計 3 回（通算計 9 回）が経過している。本ラウンドテーブルでは、前半に上記の研究成果の報告を行う。それを踏まえて、後半にワールドカフェを実施し、フロアの皆さんとコミュニティ心理学的支援の実践的検討を行う。2022 年度は当会理事が中心となって議論を進めたが、現在は当会員及び非会員にも開いている。コミュニティ心理学的支援の実践技法はどうあるべきか、そしてそれをどう捉えるべきか。皆さんとともに議論を重ねていきたい。

●ポスター発表

10月12日（土）10:30－12:30　　13号館5階1352･135A教室

ポスター発表 A

A-01　知覚されたソーシャルサポート尺度のどの項目がサポートだと感じやすいのか

上田 仁　　愛知県庁

A-02　アートワークショップ参加者の体験とピアサポートへの関心度の変化

鬼塚 淳子　　東京大学相談支援研究開発センター
落合 舞子　　東京大学
横山 孝行　　東京大学

A-03　「恵まれているのにつらい」という感情に関する探索的研究

今久保 葵　　別府大学大学院
川崎　隆　　別府大学大学院

A-04　「ずぼら」に対する集団実践的アプローチの影響の検討
―当事者-非当事者の境のない当事者研究を目指して―

山口 莉絵　　東京大学
内藤 遥香　　東京女子大学大学院
堀 祐大朗　　東京大学
須田 基暉　　東京大学

A-05　原発性局所多汗症患者を対象としたコミュニティアプローチの検討

小玉 幸助　　石巻専修大学

A-06　被援助志向性と関連する心理師の印象は何か？

松下 健　　上越教育大学

A-07　メンタルヘルスと地域差
―人はコミュニティとの関係で気晴らし行動を変える？―

高田 すず　　立命館大学
陳 暁雪　　立命館大学
川野 健治　　立命館大学

A-08 学校と市民団体の集合的創造性としての教育コミュニティ（1）
―コミュニティ・サイコロジストの役割―

坪田 祐季　大阪経済大学
菊池 美奈子　梅花女子大学
五寶 美奈子　茨木市市民活動センター
川野 健治　立命館大学

A-09 学校と市民団体の集合的創造性としての教育コミュニティ（2）
―市民活動センターとコンヴィヴィアリティ―

川野 健治　立命館大学
菊池 美奈子　梅花女子大学
五寶 美奈子　茨木市市民活動センター
坪田 祐季　大阪経済大学

A-10 なぜ日本人は英語使用場面においてシャイなのか？
―特効薬としての勇気の検討および東アジア圏の留学生との国際比較―

加藤 慧　鹿児島大学
箕口 雅博　立教大学

A-11 ミックスの子どものボディイメージの変容プロセスについて

アマディワカマ持橋 理碧良
1st STEP こころのクリニック

A-12 臨床心理学的学級風土尺度作成の試み

渡部 翔太　東京大学
宇佐美 慧　東京大学大学院教育学研究科

A-13 チーム学校の実現に向けた 4 職種合同多職種連携教育プログラム試行について
―3 職種事後面接調査からのコンピテンシー学習過程―

荊木 まき子　就実短期大学
平野 貴大　沖縄大学
門原眞佐子　就実大学
森田英嗣　大阪教育大学
石原みちる　就実大学

A-14 効果的なコンサルテーション実践において求められるスキルの検討
―コンサルテーションスキル尺度の作成―

安田 みどり　立正大学

A-15 NPO 版心理的コミュニティ感覚尺度の営利組織への適用
―日米サンプルを用いた測定不変性と妥当性の検討―

藤澤 理恵　東京都立大学
藤村 直子　株式会社ﾘｸﾙｰﾄﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄｿﾘｭｰｼｮﾝｽﾞ組織行動研究所
川西 諭　上智大学

A-16 就学前の子どもを持つ夫婦は WLB の危機をいかに乗り越えるのか
―コロナ禍が WLB にもたらしたもの―

高橋 美保　東京大学
髙田 啓　東京大学
蒲池 海斗　東京大学
島津 明人　慶應義塾大学

A-17 感情作業から見る若年労働者の職場適応の実態
―インタビューの質的研究によるカテゴリー生成―

山口 和代　南山大学
久村 恵子　南山大学
大塚 弥生　南山大学

A-18 性的マイノリティの人々が職場や就職活動で経験する困難

松髙 由佳　県立広島大学
大塚 泰正　筑波大学
飯田 順子　筑波大学
津野 香奈美　神奈川県立保健福祉大学大学院

A-19 セクシュアル・マイノリティに対する SNS 相談の実践を通じたニーズの予備的考察

高橋 周平　一般社団法人ハレルワ

A-20 女子大学生 1 年生の理想ライフコースの選択
―専門職志向に着目した選択理由の分析―

石津 和子　金城学院大学
鶴田 美保子　金城学院大学

10月13日（日）10:00－12:00　　13号館5階1352･135A教室

ポスター発表 B

B-01　組織キャンプによる「きょうだい児」支援の有効性

山田 文　目白大学
久田 満　立正大学

B-02　小学校高学年の子どものゲーム使用に関する親子間のルール
―母親を対象にしたインタビュー調査より―

鎌田 真実　北翔大学大学院
入江 智也　北翔大学

B-03　学校と家庭をつなぐチケットを用いたポジティブ行動支援がコミュニティに及ぼす影響
―定量的分析に基づいて―

枝廣 和憲　立命館大学大学院/福山大学
大島 佳香　福山大学大学院

B-04　学校と家庭をつなぐチケットを用いたポジティブ行動支援がコミュニティに及ぼす影響
―質的分析に基づいて―

大島 佳香　福山大学大学院
枝廣 和憲　立命館大学大学院/福山大学

B-05　自己愛的脆弱性に働きかける介入プログラムの検討

阿部 寧桜　別府大学大学院
川崎 隆　別府大学大学院

B-06　大学生版援助要請意図尺度の開発

木村 真人　大阪国際大学
水野 治久　大阪教育大学
永井 智　立正大学

B-07　大学生の不注意および多動・衝動性傾向と援助要請意図の関連
―悩みの深刻度と抑うつに着目して―

武藤 花　立正大学
永井 智　立正大学
伊藤 拓　明治学院大学

B-08 大学生の相談行動と過去の海外経験の関係

國富 南　立正大学
永井 智　立正大学
直井 望　国際基督教大学

B-09 抑うつ状況における中国人大学生の援助要請意図の関連要因
―COVID-19 の影響を考慮に入れて―

安 婷婷　筑波大学
永井 智　立正大学

B-10 保護観察中の非行少年における援助要請意図

廣井 いずみ　愛知みずほ大学
永井 智　立正大学

B-11 その問題、心理の専門家に相談しますか？ その 13
―Yahoo!知恵袋における「恋愛相談・人間関係の悩み」カテゴリーの質問の分析―

澤田 戒　甲南大学
福井 義一　甲南大学

B-12 中学生における友人グループの排他性と学級適応及び抑うつとの関連

鈴木 修斗　北海道大学

B-13 人並み志向は、いかなる対人的環境で心理社会的適応に寄与するか？
―被服選択状況での探索的検討―

吉田 光成　専修大学大学院
吉田 梨乃　元 専修大学
下斗米 淳　専修大学

B-14 異文化インターメディエーターのリーダーシップの認識
―理工系大学の日本人学生と留学生の場合―

小松 翠　東京工業大学

B-15 多文化カウンセリング能力訓練プログラムによる初学者の態度変化

谷渕 真也　香川大学
村川 幸穂　三光病院

B-16　大学生における友人関係動機づけと学校適応感の関連

尾上 絢音　香川大学
進藤 奈瑞菜　香川大学
谷渕 真也　香川大学

B-17　被災地復興ボランティア活動者の心理的体験過程

進藤 奈瑞菜　香川大学
尾上 絢音　香川大学
谷渕 真也　香川大学

B-18　発災後を想起する防災教育の効果に関する分析
―太平洋沿岸地域における地域実践を例に―

杉山 高志　九州大学

B-19　見守りボランティアと連携した地域安全マップ作成活動の効果検証

大久保 智生　香川大学
鈴木 修斗　北海道大学大学院

B-20　どこでもこどもカフェの仕組み
―官民学で人材育成からネットワーク支援まで―

田村 光子　植草大学短期大学
吉永 真理　昭和薬科大学

B-21　心理的支援における日蓮宗僧侶の役割
―インタビュー調査から―

徳永 前崇　東京成徳大学大学院
石隈 利紀　東京成徳大学

B-22　よさこいチーム構成員の活動参加体験過程

齊藤 裕希也　医療法人緑光会 東松山病院

B-23　労働者のソーシャル・サポートと援助要請行動の縦断的関連（1）
―研究の概要と援助要請意図・行動の実態―

中村 菜々子　中央大学
大野 さくら　中央大学大学院

佐藤 怜奈　　中央大学大学院

B-24

労働者のソーシャル・サポートと援助要請行動の縦断的関連（2）
―専門家への援助要請―

大野 さくら　　中央大学大学院
佐藤 怜奈　　中央大学大学院
中村 菜々子　　中央大学

B-25

労働者のソーシャル・サポートと援助要請行動の縦断的関連（3）
―上司・同僚・部下への援助要請―

佐藤 怜奈　　中央大学大学院
中村 菜々子　　中央大学
大野 さくら　　中央大学大学院